

佐々木孝二著 『日本文化と八幡神』

小 館 東 三

一、  
八幡様と言えば、応神天皇（菅田別命）が祭神で、多く武神と受けとられている。

ところが著者は、渡来神・祖霊神・農耕神・鍛冶神……と、多くの資料を引用して、広い視野から、日本の建国と発展過程と共に、上古の日本民族の外来文化受容に及んでいる。

理論的に確認したい宗教、信仰を材料にこれほど詳細に述べた著作を私はまだ見たことはない。

二、

その特徴を順不同であるが列挙すれば、まず、序文で、現代社会の欠陥は、物質文明の発達は、それ自体、良いことであるが、精神文明の発達に伴わず、バランスを欠いていると述べているが、まさにその通りで、宗教史研究者として立派な認識であるといつてよい。

同じく序文で、文化は政権担当者中心に考え勝ちであるが、多くの民衆の要望によって誕生するという。例えば、神仏の信仰も、その時代の社会の要望によって生れ、発展するという見方で、八幡神を取りあげている。

ご承知のように、日本民族は亡霊の祟りを恐れて祀ってきたので、鎮魂（成仏）を包含する仏教の受容がなされたと言つてよい。

末法思想の広まった平安末期から、極楽行きが熱望されて弥陀―浄土信仰が広まり、武家社会になると、武神の八幡神・鹿島神が勧請され、社会が安定し、農業生産が社会の重点となった江戸時代には農村に農業神の稻荷社が莫大の数になったこともこのことを物語っている。

三、

八幡神を語るのに、原始農耕から始めたことは大変珍しいことで、しかも日本最北の弥生文化遺跡の青森県南津軽郡田舎館村垂柳の千九百年前の米作を例にとりあげたのも最初であるし、神話の素戔嗚命と農耕文化を結びつけていることも、日本の建国の時代にふれる見方で有意義である。

記述からすると、邪馬台国九州説であるが同程度の文化圏を近畿地方に認める見方も立派である。

#### 四、

第三章の「古代王権と八幡神」の4、「鎮護国家の神」は多様性を帯びる八幡神の位置付けを明確にした記述で、鎮護国家の神として確立したことを証明している。

とくに、奈良の大仏建立の鎮守神として、手向山八幡宮の勧請は後世に大きい影響を与えているという。

#### 五、

以上、簡単に述べたが、著者の努力の大なることを物語るのは、他の研究書の詳細な検討と利用である。

参考までに、他の研究者の論述の引用を各章毎に、その数を挙げてみると次のようである。

序	五	第一章	五一
第二章	一九五	第三章	一〇一
第四章	四六	第五章	三七
第六章	五八	第七章	六五
計「五五八」			

前にも述べたが広い視野に立った点は、地域的にも、国内は勿論、朝鮮・中国・東南アジア〜インドネシアまで論述が及んでいる。

#### 六、

次に若干、私見を述べさせていただきます。

前述のように、異国の神（仏）を受容し、神仏習合により文化を高めた事は著者が強調している通りで、八幡神信仰はその代表であることは御承知の通りで、いち早く「八幡大菩薩」の称号を付せられている。本地仏が阿弥陀如来であるのに、菩薩名が一般化したことは、日本に渡来した仏教は大乗仏教で、その実践は菩薩行である。勿論、観世音菩薩は阿弥陀如来の分身であるから、どちらを称してもよいわけであるが、本書の第七章の3「生活慣習に根づく八幡信仰」が、八幡神の菩薩行的活動を物語っているし、結びにあるように、八幡神は遊行神で、積極的に地域・民衆の不幸・災難を防除し、幸せをもたらすという菩薩行の実践神であった故、全国に浸透し、定着したと言えよう。著者の言うように日本文化の発展の一原動力となったことはうたがいない。

津軽家も城下の鬼門に八幡宮を勧請し、領内神社の総社として崇拜していた。

また、著者もふれているが三社信仰の一社に数えられている。

三社様とは伊勢神宮（皇室、正直）、八幡宮（武家、清浄）、春日大明神（貴族、慈悲）を一幅画にして飾り、人間の生き方の手本としたもので、鎌倉、室町時代を経て定着し、皇室・武家・公家の三者一体になれば天下が平和であるということにもなり、江戸時代は武士から商人に至るまで祀っていた。

弘前城下でも北の既設の八幡・神明の両社に、四代藩主津軽信政はさらに春日社を勧請して三社を構成し、城下・領内の安穩を祈っている。

以上、簡単に述べたが、本書は近来稀なる充実した内容で、私自身、大変勉強させていただき、感謝の意を述べ、書評と紹介を終わらせていただく。

(東北女子大学教授)

(八幡書店、一九八九年一〇月刊 三〇七頁、A五判、二四〇〇円)